

諫早市埋蔵文化財調査協議会調査報告書 第4集

しも みね はら たか ば い せき
下峰原高場遺跡

—諫早西部新住宅市街地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2002

諫早市埋蔵文化財調査協議会

五家原岳

有明海

平松城跡

下峰原遺跡

国道34号線

下峰原遺跡C地点

下峰原高場遺跡



発刊のことば

長崎県の県央部に位置する諫早市は、有明海、橘湾、大村湾と三つの豊饒の海に面し、古くから海上・陸上の交通の要衝として栄えています。

それは縄文時代に遡る考古遺物が証明しています。すなわち橘湾を望む有喜貝塚では鹿児島県方面で作られた土器が出土しますし、また漁労で使う釣針などの漁具が日本海に流れ込む対馬暖流域に分布するものと同じであることからです。そこから類推されるのは、同じ漁法による漁労活動と、人と人との交わりであり、そこには私たちの想像を絶する規模で交流が存在していたことです。また、現在では棲息環境が存在しない、カキなどが貝塚から出土します。このことは当時が現在よりも暖かく、海水面が今よりも上昇していたことを物語るものです。

有明海に面した地区では、小野宗方遺跡や対岸正久寺町の西常盤貝塚でカキが大量に捕獲・消費されています。現在の田の下から貝塚が発見され、縄文時代には海水面が現在よりも低い時期があり、すなわち海退時に作られた貝塚遺跡があったことを証明しています。

このように、現在われわれが生活しているのとは大きく違う環境のもとで生活した人々がいたのです。

今回報告する下峰原高場遺跡は、これらの遺跡よりさらに古く遡る旧石器時代の遺跡で、最後の氷河期であるビュルム氷期後と考えられ、現在の対岸が陸地であったか、もしくは湖水の状態であった時期に営まれた遺跡と考えられます。

このように私たちのまわりには未だ十分に解明されていない過去の歴史があります。

4月からは完全週5日制が実施されます。いろいろなものに興味をもち、解明する方向性を模索する子どもたちが育つことを切に望んでいます。その子どもたちが関心をよび起こすための一助を本書が果たしうるものであれば幸いと存じます。

最後になりましたが、本調査に関しまして諸種のご協力を賜りました長崎県住宅供給公社の皆様をはじめ、地元町内会、また炎天・厳寒にも調査にご従事頂きました皆様に、心から感謝申し上げます。

2002年3月

諫早市埋蔵文化財調査協議会
会長 前田重寛

例 言

1. 本書は諫早市破籠井町に所在する下峰原高場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は諫早西部新住宅市街地開発事業に伴う記録保存のための発掘調査である。
3. 調査は長崎県住宅供給公社の委託を受けて、諫早市埋蔵文化財調査協議会が実施した。
4. 調査期間中、堆積層準の検討について、長崎大学教育学部助教授長岡信治氏に現地調査をお願いし、またその分析結果についての所見を頂き、V章に掲載した。
5. 調査は試掘調査を平成11年6月14日から7月9日まで実施した。
本調査は平成11年11月1日から平成12年11月27日まで実施した。
整理作業は現地において一部実施し、平成12年11月27日以降は諫早市郷土館において行った。
6. 本書に用いた方位は磁北を示し、高度は海拔高である。
7. 本書掲載挿図の中、第6図「遺跡地形図及び調査区設定図」は、長崎県住宅供給公社より提供された図面を使用して調製したものである。
8. 航空写真撮影は、有限会社スカイサーベイ九州に委託して実施した。
9. 挿図の縮尺は統一に努めたが、一部遺物分布図において水平距離と垂直距離の縮尺が異なるものがある。
10. 挿図中「遺物の出土状況」を示す分布図中の番号は、「当該調査区の調査時の取上げ番号」である。
取り上げ番号のつぎの「() 書きした番号」が挿図・遺物実測図の番号である。
図版中の番号は、挿図・遺物実測図の番号に一致している。
11. 遺物実測図の縮尺は原則として石器S-3/4、土器S-1/2・1/3である。
12. 本書の執筆は下記のとおりである。
I、Ⅲ-2-3、Ⅳ-3…古賀力
Ⅲ-2-5-4…橋本幸男
その他…秀島貞康
V…長岡信治、大石雅之、鈴木毅彦
13. 調査において出土した遺物、本書に用いた図画・写真類は諫早市郷土館において保管している。
14. 本書の編集は、秀島が担当した。

目 次

I	遺跡の地理的・歴史的環境と周辺の遺跡	1
II	調査の経緯と経過	6
III	遺跡の調査	7
1	試掘調査	7
- 1	調査区の設定	7
- 2	土層の状況と出土遺物	7
2	本調査	8
- 1	調査区の設定と調査の方法	8
- 2	調査体制	9
- 3	検出された遺構	12
①	ピット群	12
②	焼土塊が入ったピット群	14
③	焼土塊が入ったピット	14
④	ピットを伴う石器作業跡	14
⑤	A溝、B溝	19
⑥	集石を伴う土壇	19
⑦	炭窯	19
⑧	ドーナツ状土壇	23
- 4	土層の堆積状況	25
①	1区の土層	25
②	2区の土層	33
- 5	遺物の出土状況と出土遺物	35
①	1区3層遺物の出土状況	35
②	1区3層ユニットの配置	57
③	石器	61
- ア	4層の遺物	61
- イ	3層の遺物	62
- ウ	2層の遺物	68
④	土器	119
- ア	土器の接合について	119
- イ	縄文土器	135
- ウ	その他の土器資料	141
- エ	近世～近代の資料	141
IV	総 括	151
V	下峰原高場遺跡の地形地質	159

挿 図 目 次

第1図	諫早市位置図	1
第2図	周辺遺跡分布図 (S-1/40,000)	2
第3図	西輪久道遺跡出土遺物	3
第4図	鷹野遺跡出土遺物	4
第5図	試掘4調査区石斧出土状況図 (S-1/100、1/8)	7
第6図	遺跡地形図及び調査区設定図 (S-1/1,000)	10
第7図	1区・2区遺構配置図 (S-1/500)	11
第8図	1区F~H-9~12調査区ピット群及び遺物分布図 (S-水平1/120、垂直1/60)	13
第9図	1区F・G-8調査区焼土塊を含むピット群実測図 (S-1/20)	15
第10図	2区I-7調査区焼土塊が入ったピット実測図 (S-1/20)	16
第11図	2区J・K-5調査区ピットを伴う石器作業跡実測図 (S-1/6)	17
第12図	2区J・K-5調査区ピットを伴う石器作業跡遺物接合図 (S-1/6)	18
第13図	2区A溝、B溝実測図 (S-1/60、1/30)	20
第14図	2区L-7調査区集石土壌実測図 (S-1/30)	21
第15図	2区K・L-7・8調査区炭窯実測図 (S-1/20)	22
第16図	1区H・I-5調査区ドーナツ実測図 (S-1/30)	24
第17図	1区土層図 (北壁)	27~28
第18図	1区土層図 (西壁)	29~30
第19図	2区土層図	31~32
第20図	1区B-11調査区原石分布図 (S-1/30)	34
第21図	1区B-7、C-8調査区3層出土遺物分布図 (S-1/60)	45
第22図	1区C-9、10調査区3層出土遺物分布図 (S-1/60)	46
第23図	1区D-2・3調査区3層出土遺物分布図 (S-1/60)	46
第24図	1区B・C-11・12調査区3層出土遺物分布図 (S-1/60)	47
第25図	1区D・E-6・7調査区3層出土遺物分布図 (S-1/60)	48
第26図	1区D・E-9・10調査区3層出土遺物分布図 (S-1/60)	49
第27図	1区D・E-11・12調査区3層出土遺物分布図 (S-1/60)	50
第28図	1区H・I-7・8調査区3層出土遺物分布図 (S-1/60)	51
第29図	1区H・I-9・10調査区3層出土遺物分布図 (S-1/60)	52
第30図	1区F-11・12調査区3層出土遺物分布図 (S-1/60)	53
第31図	2区E-4・5調査区3層出土遺物分布図 (S-1/60)	53
第32図	1区D~K-5~13調査区無斑晶質安山岩分布図 (S-1/250)	54
第33図	1区E-10調査区2層出土遺物分布図 (S-水平1/40、1/8、垂直1/40)	55

第34図	1区C-9調査区2・3層出土遺物分布図(S-1/40)	56
第35図	1区E-11調査区2・3層遺物出土状況図(S-1/40)	57
第36図	1区3層ユニット配置図	59~60
第37図	石器実測図1	61
第38図	石器実測図2	69
第39図	石器実測図3	70
第40図	石器実測図4	71
第41図	石器実測図5	72
第42図	石器実測図6	89
第43図	石器実測図7	90
第44図	石器実測図8	91
第45図	石器実測図9	92
第46図	石器実測図10	93
第47図	石器実測図11	94
第48図	石器実測図12	95
第49図	石器実測図13	96
第50図	石器実測図14	97
第51図	石器実測図15	98
第52図	石器実測図16	99
第53図	石器実測図17	100
第54図	石器実測図18	108
第55図	石器実測図19	109
第56図	石器実測図20	110
第57図	石器実測図21	111
第58図	石器実測図22	112
第59図	石器実測図23	113
第60図	石器実測図24	114
第61図	試掘4調査区土器接合図(S-1/40)	121
第62図	1区D~F-9~11調査区土器接合図(S-1/120)	122
第63図	2区C-7、D-8調査区土器接合図(S-1/120)	123
第64図	2区E-5調査区土器接合図(S-1/20、1/100)	124
第65図	2区F-5、H-4調査区土器接合図(S-1/120)	125
第66図	2区F~H-7~10調査区土器接合図(S-1/120)	126
第67図	2区K~M-7~10調査区土器接合図(平面分布)(S-水平1/120、垂直1/15)	127
第68図	2区K~M-7~10調査区土器接合図(垂直分布)(S-水平1/120、垂直1/15)	128
第69図	2区N・O-8調査区土器接合図(S-1/60)	129

第70図	2区P-7・8調査区土器接合図 (S-1/60)	130
第71図	2区R-7調査区土器接合図 (S-水平1/30、垂直1/15)	131
第72図	2区S-8調査区土器接合図 (S-1/60)	132
第73図	2区U-11調査区土器接合図 (S-1/60)	133
第74図	2区W-11調査区土器接合図 (S-1/60)	134
第75図	土器実測図1	146
第76図	土器実測図2	147
第77図	土器実測図3	148
第78図	土器実測図4	149
第79図	土器実測図5	150
第80図	石鏃集成図	157

表 目 次

第1表	試掘調査出土遺物一覧	8
第2表	2区J・K-5調査区ピットを伴う石器作業跡石器接合一覧	18
第3表	1区4層出土遺物組成一覧	36
第4表	1区3層出土遺物組成一覧	36
第5表	1区2層出土遺物組成一覧	37
第6表	2区2層出土遺物組成一覧	38
第7表	2区遺構及び3～5層出土遺物組成一覧	40
第8表	1・2区層位別石材一覧	40
第9表	1・2区出土遺物層位別石材別器種別一覧	41
第10表	1区石器器種別分布概念図	42
第11表	1区石器器種別分布概念図	43
第12表	1区石器器種別分布概念図	44
第13表	1区3層ユニット組成一覧	61
第14表	石鏃形態分類図・表	103
第15表	石鏃属性一覧	105
第16表	出土遺物属性一覧1	115
第17表	出土遺物属性一覧2	116
第18表	出土遺物属性一覧3	117
第19表	出土遺物属性一覧4	118
第20表	接合土器一覧表	120
第21表	掲載土器一覧表1	143

第22表	掲載土器一覧表 2	144
第23表	掲載土器一覧表 3	145
第24表	1区ユニット組成復元一覧	152

図 版 目 次

巻頭図版	遺跡周辺航空写真 (南西から)	
図版 1	1. 下峰原高場遺跡全景 (北東から)	
	2. 1区俯瞰写真 (B~F-6~11調査区)	
図版 2	1. 1区B-11調査区土層堆積状態 (東壁)	
	2. 1区J-8調査区 (試掘3調査区) 土層堆積状態 (北壁)	
図版 3	1. 1区F・G-9~11調査区 ピット群 (北から)	
	2. 同上 ピット2完掘状況 (北から)	
図版 4	1. 1区F・G-8調査区 焼土塊が入ったピット群全景 (北から)	
	2. 同上 ピット2の焼土塊の状況 (東から)	
図版 5	1. 2区I-7調査区 焼土塊が入ったピット	
	2. 完掘状況	
図版 6	1. 2区J・K調査区 ピットを伴う石器作業跡・赤色チャート、土器出土状況 (西から)	
	2. 完掘状況 (西から)	
図版 7	1. 2区A溝、B溝検出状況 (西から)	
	2. 完掘状況 (西から)	
図版 8	1. 2区L-7調査区 集石を伴う土壙 (南から)	
	2. 完掘状況 (南から)	
図版 9	1. 2区K・L-7・8調査区 炭窯検出状況 (東から)	
	2. 完掘状況 (東から)	
図版10	1. 1区H・I-5調査区 ドーナツ検出状況 (東から)	
	2. 完掘状況 (南から)	
図版11	1. 試掘4調査区2層 局部磨製石斧 (305) 出土状態	
	2. 試掘2調査区2層 ナイフ形石器 (87) 出土状態	
	3. 1区C-10調査区2層 異形石器 (302) 出土状態	
	4. 1区D-7調査区3層 ナイフ形石器 (3) 出土状態	
	5. 1区E-10調査区3層 台形石器 (14) 出土状態	
	6. 1区E-10調査区3層 異形石器 (69) 出土状態	
	7. 1区I-10調査区2層 乳棒状石斧 (312) 出土状態	
	8. 1区D-12調査区2層 土器出土状態	

- 図版12 1. 4層の石器 (1, 2) (左:背面、右:腹面)
2. 3層の石器 (3~38)
3. 3層の石器 (39~66)
4. 3層の石器 (67~69)
- 図版13 1. 2層の石器 (70~87)
2. 2層の石器 (88~100)
- 図版14 1. 2層の石器 (101~115)
2. 2層の石器 (116~132)
- 図版15 1. 2層の石器 (133~150)
2. 2層の石器 (151~168)
- 図版16 1. 2層の石器 (169~180)
2. 2層の石器 (181~192)
- 図版17 1. 2層の石器 (193~200)
2. 2層の石器 (201~202)
- 図版18 1. 2層の石器 (203~227)
2. 2層の石器 (228~234)
- 図版19 1. 2層の石器 (235~241)
2. 2層の石器 (242~271)
- 図版20 1. 2層の石器 (272~301)
2. 2層の石器 (302~307)
- 図版21 1. 2層の石器 (308~311)
2. 2層の石器 (312)
- 図版22 1. 2層の石器 (313~317)
2. 2層の石器 (318)
3. 2層の石器 (319)
4. 2層の石器 (320~327)
- 図版23 土器 (1~37)
- 図版24 1. 土器 (38~60)
2. 土器 (61~105)
- 図版25 1. 土器 (106~126)
2. 土器 (127~145)
- 図版26 1. 刷毛目のある土器、内黒碗、瓦質土器 (146~160)
2. 近世の資料 (161~172)
3. 2層の土器 (130)
- 図版27 1. 6~8・11類の石鏃
2. 早期の土器

I 遺跡の地理的・歴史的環境と周辺の遺跡

下峰原高場遺跡は諫早市の北西部破籠井町に所在し、東経 $130^{\circ}1'50''$ 、北緯 $32^{\circ}52'$ を測り、同町の西側は大村市と境界を接している。諫早市域内では北側は大渡野町と、東側は栄田町、南側は真崎町にそれぞれ接している。

遺跡の立地は第三紀末に噴出した玄武岩によって形成された風観岳（標高236.2m）の裾部に位置していて、基盤である古第三紀の砂岩堆積岩層を、更新世初期～中期の豊肥火山活動による多良岳火山の火山碎屑物が覆って台地状をなし、遺跡の標高は76m前後を数える。

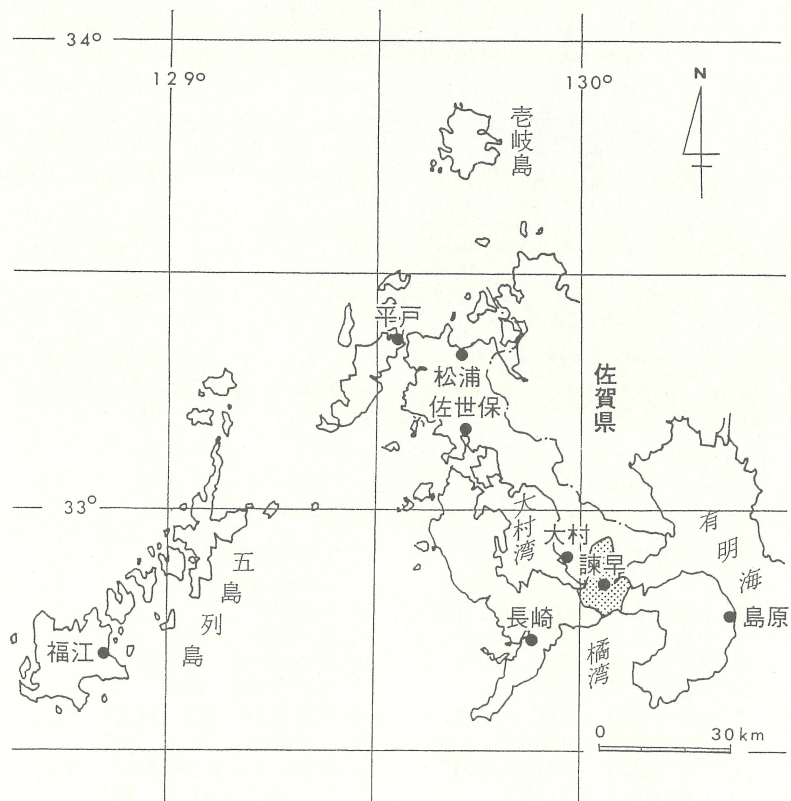
遺跡が立地する台地東側は多良岳火山に源を発して南流する本明川に向かって緩やかに傾斜し、本明川に平行するJ R九州・大村線、国道34号辺りで川の開析による段丘崖状を呈している。

一方、台地西側は風観岳に源を発し大村湾に注ぐ真崎川によって開析された谷筋に面していて、東側に比べ急傾斜地形である。これらの立地は旧石器時代以降の生活立地を充足する好適の地理的環境である。ちなみに現在では大村湾奥の津水町からの距離は直線で2.5kmの位置関係にある。

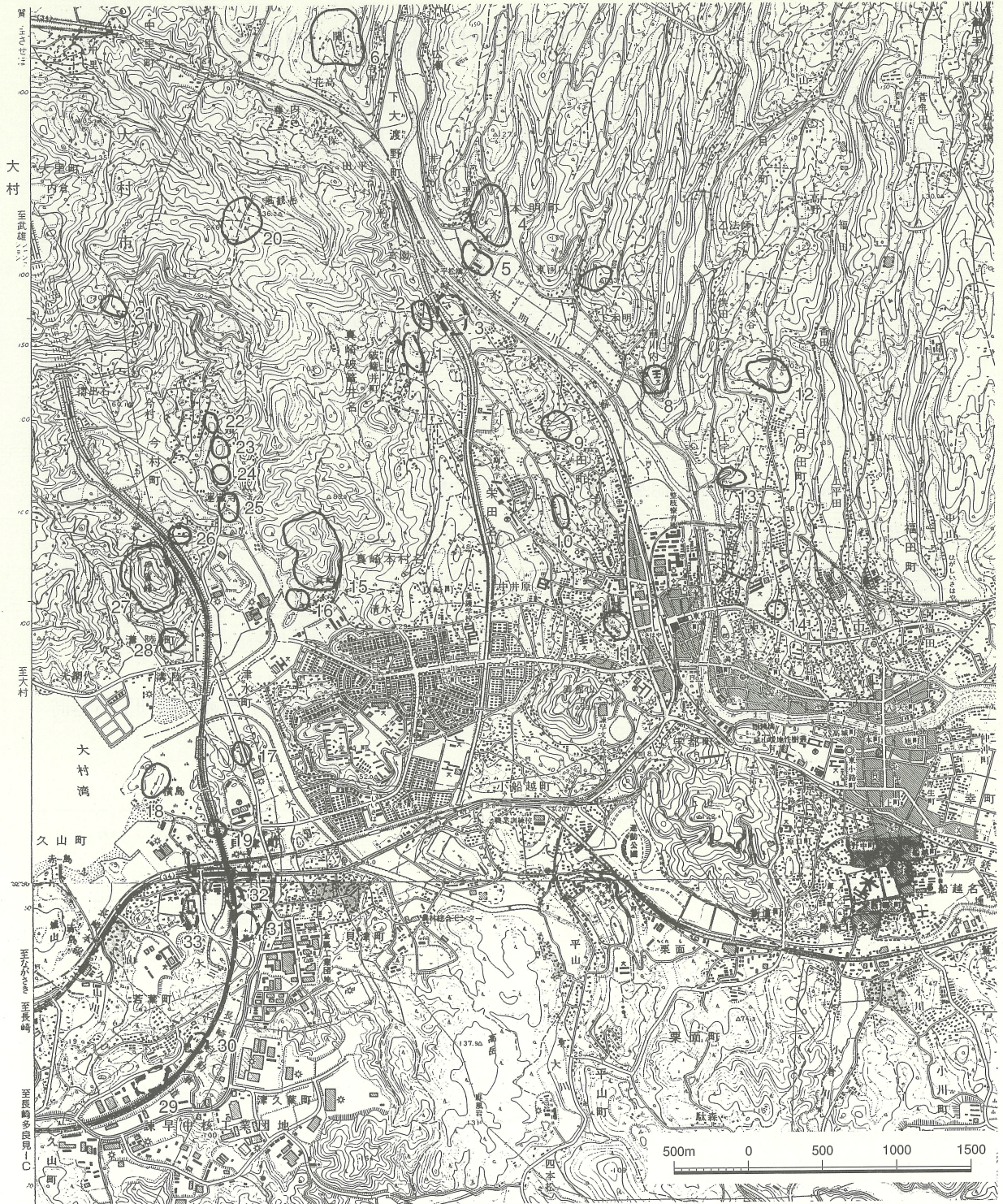
本遺跡の周辺には第2図の遺跡地図に示したように、隣接の大村市域を含めて後期旧石器時代以降近世にいたるまでの遺跡が点在している。

本遺跡を除く主なものを挙げると、旧石器時代では諫早・大村両市の境界を流れ大村湾に注ぐ真崎川流域に多いが、真崎西遺跡でナイフ形石器が記録されている以外、詳細は不明である。

一方同じ大村湾に流れ込む西大川沿いに目を向けると、雀ノ倉遺跡、牛込A・B遺跡、岩下遺跡、西輪久道遺跡、鷹野遺跡など諫早中核工業団地用地造成工事及び九州横断自動車道建設工事に伴う調査で報告された重要な遺跡群があった。



第1図 諫早市位置図

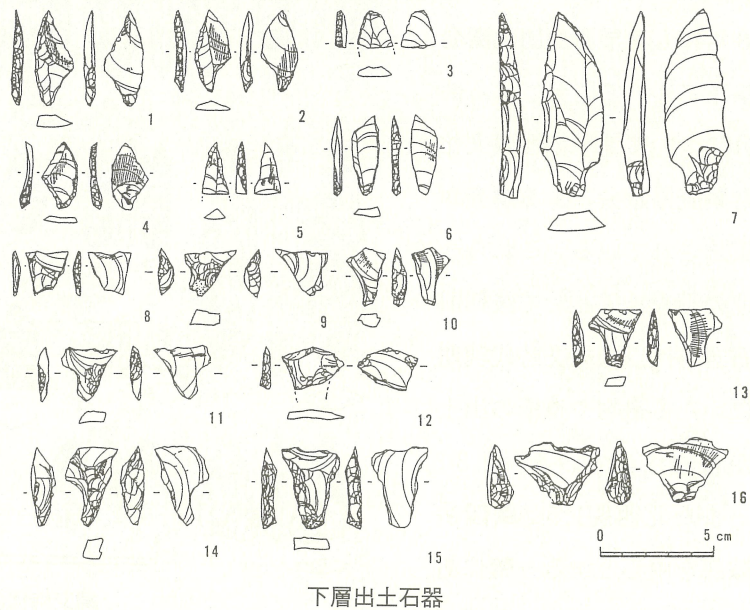
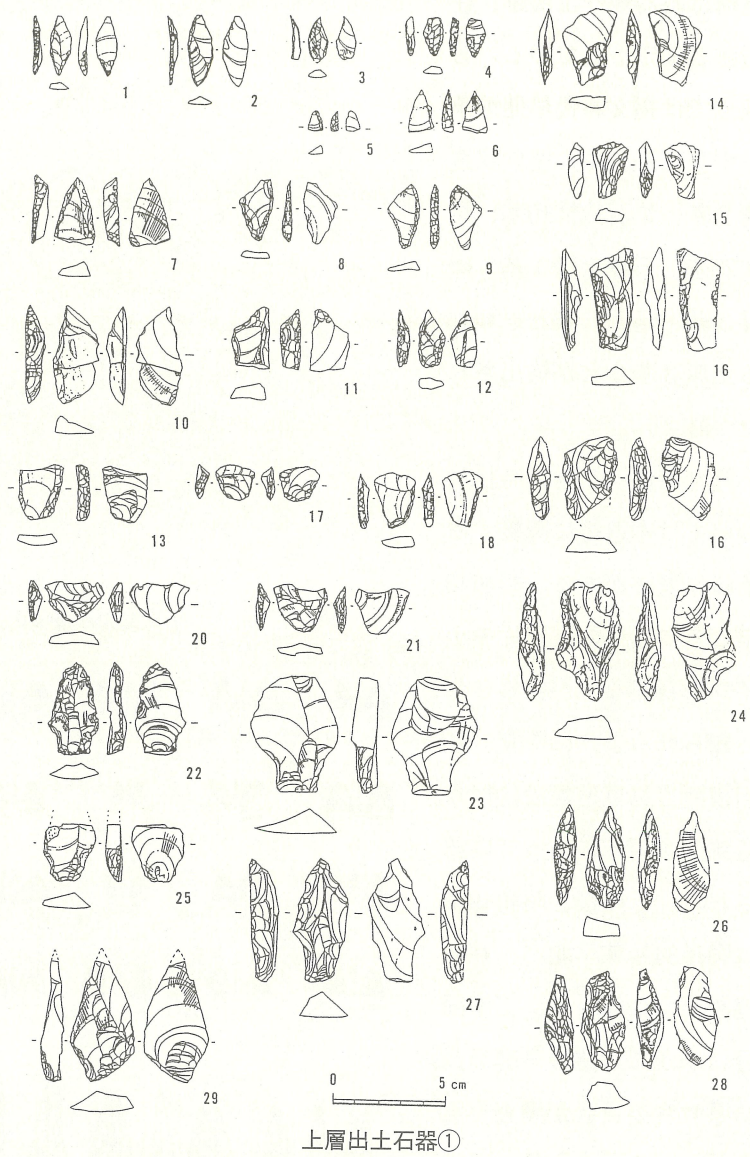


- | | | |
|--------------------|-------------------|--------------------|
| 1 下峰原高場遺跡 | 12 上横址遺跡 | 23 多々良川B遺跡(旧石器・縄文) |
| 2 下峰原遺跡(旧石器・縄文) | 13 折山頭遺跡 | 24 多々良川A遺跡(縄文) |
| 3 上峰原遺跡(旧石器・縄文・近世) | 14 金谷遺跡 | 25 蓮蔵寺遺跡(旧石器・縄文) |
| 4 平松城跡(中世) | 15 真崎城跡(中世) | 26 迫ノ山遺跡(旧石器~弥生) |
| 5 平松城跡根小屋跡(中世) | 16 真崎西遺跡(旧石器) | 27 伊賀峰城跡(中世) |
| 6 開城推定地(中世) | 17 西佐竹遺跡(縄文) | 28 溝陸遺跡(旧石器・縄文) |
| 7 本明B遺跡(古墳) | 18 貝津横島B遺跡(縄文) | 29 鷹野遺跡(包) |
| 8 本明石棺群(市指定)(古墳) | 19 浜田遺跡(旧石器・縄文) | 30 西輪久道遺跡(包) |
| 9 八天下遺跡(旧石器~弥生) | 20 風観岳支石墓群(縄文・弥生) | 31 牛込B遺跡(包) |
| 10 上打越遺跡(旧石器) | 21 鹿越遺跡(旧石器・縄文) | 32 雀ノ倉遺跡(包) |
| 11 永昌遺跡(縄文) | 22 善福寺遺跡(旧石器・縄文) | 33 柿崎遺跡(包) |

第2図 周辺遺跡分布図(S-1/40,000)

西輪久道遺跡は、標高20 m強の低丘陵の緩斜面上に立地し、旧石器時代の礫群3基や縄文時代早期～前期にかけての集石遺構6基、炉跡3基、溝状遺構1基が検出された。旧石器時代の遺物は第Ⅲ層～第Ⅳ層を中心に一部第Ⅴ層にかけて出土する上層石器群と、Ⅵ層～第Ⅶ層から出土する下層石器群に分離されている。上層石器群はナイフ形石器、台形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、角錐状石器などが確認され、時期的には日の岳Ⅱ層に併行あるいは先行するとされ、さらに細石核、細石刃も確認された。下層石器群はナイフ形石器と横長剥片の打面を基部にする刃部の長い台形石器、剥片尖頭器が伴う石器群で、日の岳Ⅲ層に併行すると見られている（註1）。

鷹野遺跡は標高24～37mほどの低丘陵上に立地し、A・B地点があった。A地点は二時期のナイフ形石器文化と細石器文化所産の集石遺構、縄文時代早期の竪穴状遺構4基、集石遺構15基、炉穴10基、礫群5基、落とし穴と思われる土壌8基などが検出され、竪穴状

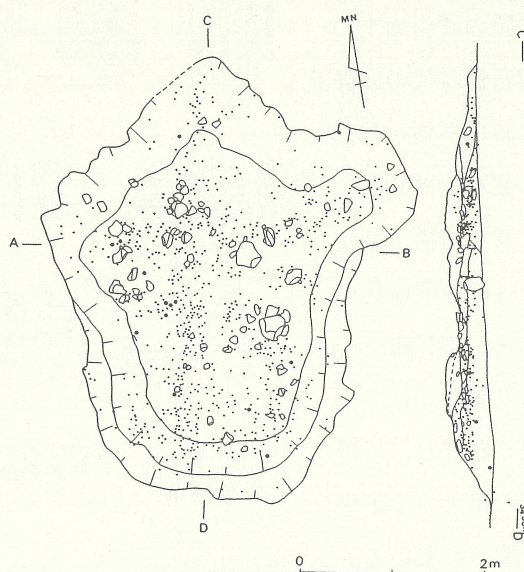


第3図 西輪久道遺跡出土遺物

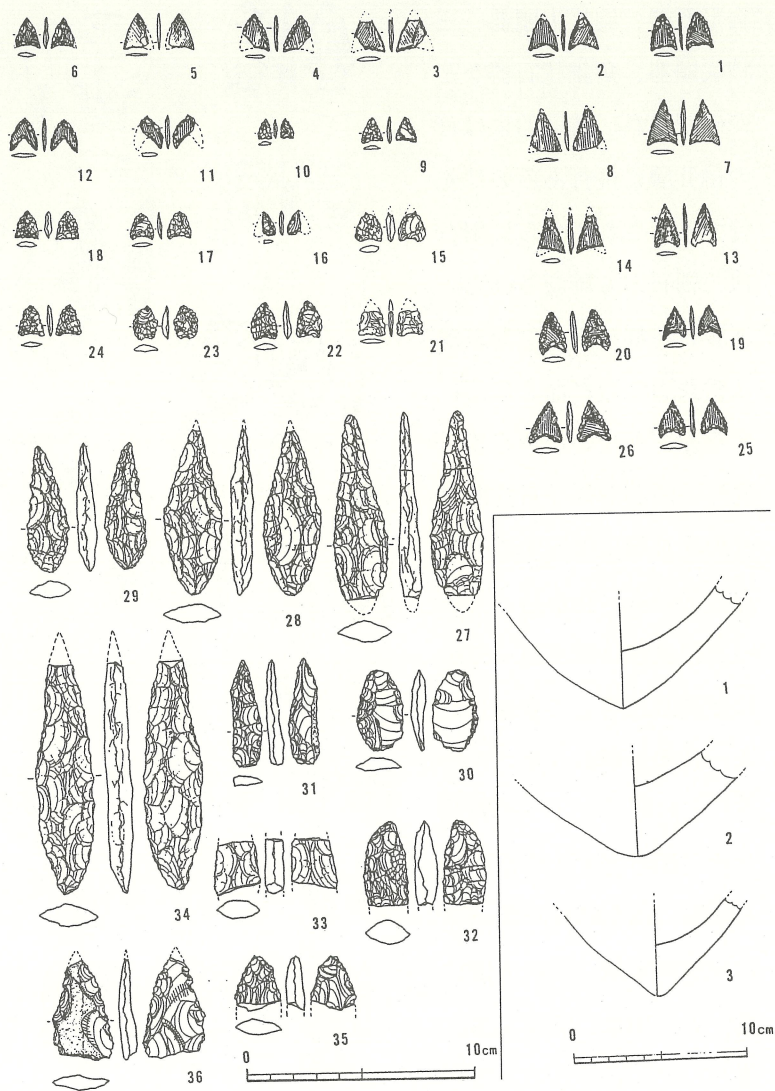
遺構は石器製作工房跡、住居跡と推定されている。B地点では縄文時代早期前葉～中葉にかけての竪穴状遺構2基、集石遺構10基、炉穴20基、石蓋土壇1基、礫群3基、落とし穴と思われる土壇3基などが検出された(註2)。

縄文時代及び弥生時代については本遺跡に隣接する下峰原遺跡がある。昭和43年ごろに各種の土器片やナイフ形石器などが採集されて知られるようになり、九州横断自動車道建設に伴う遺跡分布調査によって確認された。その後、昭和49年に国道34号諫早北バイパス建設工事に伴って、工事部分にかかる遺跡の一部を長崎県教育委員会が調査を実施している。その後、平成8年にも諫早西部団地開発事業に伴って開発に係る部分について諫早市埋蔵文化財調査協議会による調査が実施されている。これら一連の調査結果として後期旧石器時代以降縄文時代晩期にいたる遺物や遺構の出土が報告されている(註3)。

また北西約1.5km風観岳鞍部を中心とする一帯にある風観岳遺跡群では墓域と



1号竪穴状遺構内遺物出土状況



縄文時代の遺物

第4図 鷹野遺跡出土遺物

一部生活域が共時的に存在する可能性が考えられ、その解明のため1997年度以降継続して調査を行っており、縄文時代晩期の本遺跡及び下峰原遺跡との関連で注目される遺跡である。遺跡は広範囲に展開し、支石墓は長崎街道を挟んで西側丘陵部～東側斜面と、東側の風観岳頂部～西側斜面に立地している。西側には箱式石棺を内部主体にする支石墓が多く、東側には土壙を内部主体にもつという傾向が窺われる。

また第3・5次に調査を実施した西側丘陵部では、石器4600余点、土器600余点が出土し、また柱穴様のピット群が検出されるなど、この遺跡が単に支石墓のみで構成されるのではなく、生活域をも含んだ遺跡として複雑な様相を呈している（註3）。

古墳時代では本明川対岸の台地先端に古墳時代初頭の墓地が営まれ、その代表としては昭和15年頃から所在を知られていた市指定史跡本明石棺群がある。昭和43年に調査が実施され、古墳時代初頭の石棺群であることが承知された。

古代には推定であるが西海道が付近を通っていたとされ、現代の行政界は古代の彼杵郡・高来郡の境界と概ね同じであり、中世になると国境として真崎城・尾和谷城・平松城・伊賀峰城などが築かれている。

尾和谷城は大村氏に関する記録によれば文明6（1446）年、有馬貴純の大村攻めに際し有馬氏に加担した伊佐早城主西郷尚善が、有馬勢の先鋒として支城尾和谷城を経て大村に攻め入ったとあり、これが尾和谷城に関する初見である。平成11年度の諫早市教育委員会による遺跡の確認調査により、戦国末期の遺構の存在が確認され、周知の遺跡として認知された。その後、平成12年に県営中山間地域総合整備事業に伴う試掘調査が実施され柱穴などの遺構が検出されている。

本明川を隔てた対岸にある平松城は小規模ながら各種遺構がよく残されている。平成3年に諫早市教育委員会が実施した圃場整備事業に係る根小屋推定地の試掘調査では、田圃下面から往時の造成地部分を検出し、柱穴などの遺構を検出している。12～13世紀ごろの中国製青磁や滑石製石鍋、中世陶器、明代の青花などが出土している。

真崎城・伊賀峰城は大村湾最奥部にある津水の港に関して設けられた戦略拠点としての城であろう。

近世になると本遺跡の東側に沿って長崎街道が走り、風観岳の鞍部、日野見峠を越えて大村市に入る。途中の最も保存がよい部分については史跡「大村街道」として諫早市教育委員会が指定している。また諫早・大村両市の行政境には、『大村郷村記』に佐賀藩と大村藩との藩境に築かれたと記録されている積石塚が残されている。

註1 長崎県教育委員会『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急調査報告書Ⅱ』1985

註2 長崎県教育委員会『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急調査報告書Ⅲ』1986

註3 諫早市教育委員会『風観岳支石墓群発掘調査概要報告書』2002

Ⅱ 調査の経緯と経過

調査の契機は、長崎県住宅供給公社が行う諫早西部新住宅市街地開発事業に伴うもので、平成11年5月25日付11長住公第114号で事業予定地の諫早市破籠井町について埋蔵文化財包蔵の存否についての照会を受けた。

これを受けて諫早市教育委員会は長崎県住宅供給公社と協議を実施し、

- 1) 当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないものの
- 2) 先年調査の下峰原遺跡C地点と隣接していること
- 3) 当該地は山林として経年したと思われ、大木が林立していること、周辺は耕作に伴い地形が往時と改変されているものの、当該地はその影響をあまり受けていないと思われること
- 4) 崖地の観察などにより、当該地には火山灰が堆積すること

などの要素により、事業実施前の遺跡の存否について範囲の確認を含めた試掘調査を実施することが望ましいとの認識に達した。

そこで試掘調査を諫早市埋蔵文化財調査協議会が担当することとし、同協議会と諫早市教育委員会、長崎県住宅供給公社との間で調査事務に係る委託契約を取り交わし試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は平成11年6月14日から試掘調査を実施し、同年7月9日で終了した。

試掘調査は全部で11箇所の調査区を設定し実施した。遺物は9箇所の調査区で確認された。特に1区域に火山灰の遺存が良好であり、かつ旧石器時代や縄文時代の遺物が存在すること、これら遺物のうち旧石器時代の遺物については火山灰層中に含まれる可能性のあることなどが予想された。

本遺跡については、周知の埋蔵文化財包蔵地としての遺跡台帳への登載がなされていなかったため、遺跡の発見届等の事務処理を行い、下峰原高場遺跡として周知化することとなった。

以上により、長崎県住宅供給公社と発掘調査及び整理作業に関する契約を取り交わし、試掘調査に引き続き諫早市埋蔵文化財調査協議会が調査を実施することとなった。

Ⅲ 遺跡の調査

1 試掘調査

一 1 調査区の設定

調査は長崎街道西側の丘陵域全体の10,700m²と広大な面積に及んでいる。丘陵頂の平坦面は直線距離で140m、幅30~40mを測り、平坦面と周縁の比高は4~8mほどある。しかし周縁部は西側にかなりの傾斜面があり、遺跡の立地は標高76m前後の平坦面にあるであろうとの想定から、調査区の設定をおこなった。

遺跡全体は樹木と竹林で竹木が密生し、1m中に分け入るのが困難なくらいであった。そこでまず丘陵平坦部約1,200m²ほどを伐開し、地形の全容を窺い知れる空間を確保することとした。そして遺跡のほぼ中央を東西に掘削された赤道を挟んで、地層の状況が異なっていると推定されたので、赤道南側に1~3の3調査区、北側に4~11の8調査区を設定することとした。

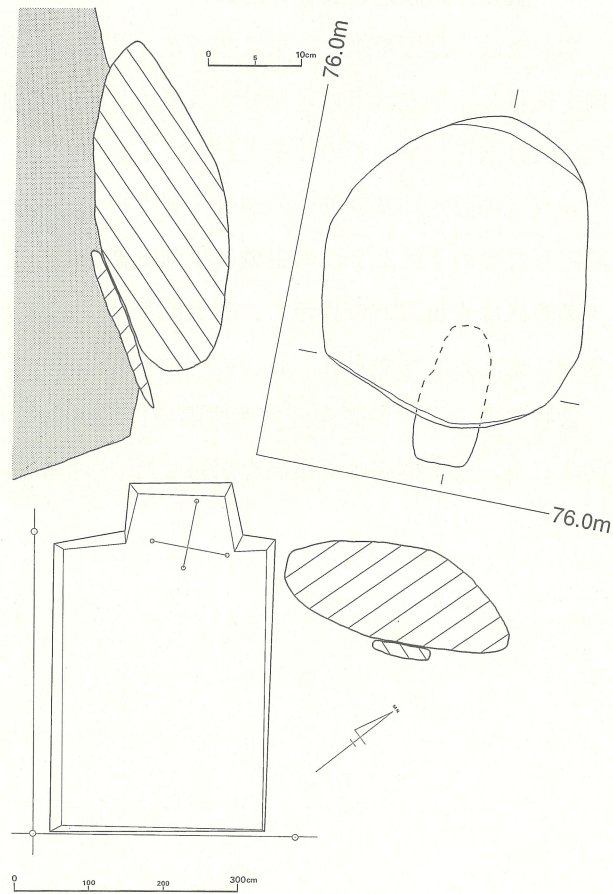
調査はトレンチ法で実施し、上位から下位にかけて順次掘り進める方法でおこない、出土遺物は1/10で図化し、同時に標高も記録することとした。

一 2 土層の状況と出土遺物

調査の結果、土層は遺跡南側で4枚、北側で3枚ほどが確認された。調査時の観察の結果、I~III層（本調査1区1~3層に比定）から阿蘇IVまたは始良丹沢火山灰・ATに比定可能な火山ガラスが確認され、開地遺跡での火山灰遺存の良好な遺跡であることを窺わせた。各土層の説明については本調査土層の説明を参照願いたい。

なお、試掘調査の調査区と本調査の調査区との関係は、試掘1調査区が本調査時のA・B-8に、同2調査区が同F-8に、同3調査区がJ-8に比定される。

遺物は第1表の如く石器409点、土器108点が出土した。石器は旧石器時代の遺物から縄文時代の遺物を含み、また土器相も縄文時代晩期のものが主であった。第42図87のナイフ形石器は



第5図 試掘4調査区石斧出土状況図(S-1/100、S-1/8)

第2調査区の3層周辺から出土したもので、旧石器包含層の存在を髣髴させ、また第56図305の扁平な局部磨製石斧は第5図、図版11-1のように水平位で刃部をまわりから看取可能なような状態に上石を載せていた。このような状況から、先年調査の峰の原遺跡との相関を強く感じさせ、また大村市との市境に立地する風観岳支石墓群との関係も改めて感じさせる遺跡であった。

調査区	削片	剥片	細石刃	使用痕のある剥片	石錐	石犁様	磨石	ナイフ	削器	石鏃	石斧	台形	叩石	角錐状	鋸齒縁	搔器	計	土器
1	17	5	1	1	1												25	1
2	29	2		4		1	1	1									38	2
3	11	3		1					1	1							17	8
4	138	32		7						2	1	2	1	1			184	60
5	15	5		1													21	1
6	25	3		2													30	18
7	56	3	2	5											1	1	68	15
8	10	2															12	2
9	11	3															14	1
計	312	58	3	21	1	1	1	1	1	3	1	2	1	1	1	1	409	108

第1表 試掘調査出土遺物一覧

2 本 調 査

一 1 調査区の設定と調査の方法

本調査は、試掘調査の結果に基づき、県住宅供給公社と発掘調査及び事務についての委託契約を締結し、平成11年11月15日から開始した。現地での発掘調査には約1年を必要とし、平成12年11月24日にすべての作業工程が終了した。

調査区の設定は試掘調査の調査区を重複するように設定した。また丘陵の稜線に沿うように設定したため1区と2区の主軸はずれる結果となった。

調査区は4m四方に設定し、調査区番号は1区、2区に大区分し、東西方を西から1、2、3…、南北方を南からA、B、C…と呼称した。

遺物の取上げは各調査区の南西隅の打設杭をX・Y軸の(00:00)として計測し、1/10に図化した。また標高は海拔高を記録した。

一 2 調査体制

試掘調査、本調査を実施した諫早市埋蔵文化財調査協議会の体制は以下のとおりである。

[試掘調査]

会 長 立山 司（諫早市教育長）
副 会 長 田嶋 将（教育次長）
事務局長 國井 政武（文化課長）
事 務 局 秀島 貞康（調査担当、参事補）
川瀬 雄一（調査担当、事務職員）
古賀 力（調査担当、埋蔵文化財調査員）
橋本 幸男（調査担当、調査指導員）

[本調査]

会 長 前田 重寛（諫早市教育長 H12. 10. 1～）
立山 司（諫早市教育長 ～H12. 9. 30）
副 会 長 田嶋 将（教育次長）
事務局長 國井 政武（文化課長）
事 務 局 秀島 貞康（調査担当、参事補）
川瀬 雄一（調査担当、事務職員）
古賀 力（調査担当、埋蔵文化財調査員）
橋本 幸男（調査担当、調査指導員）

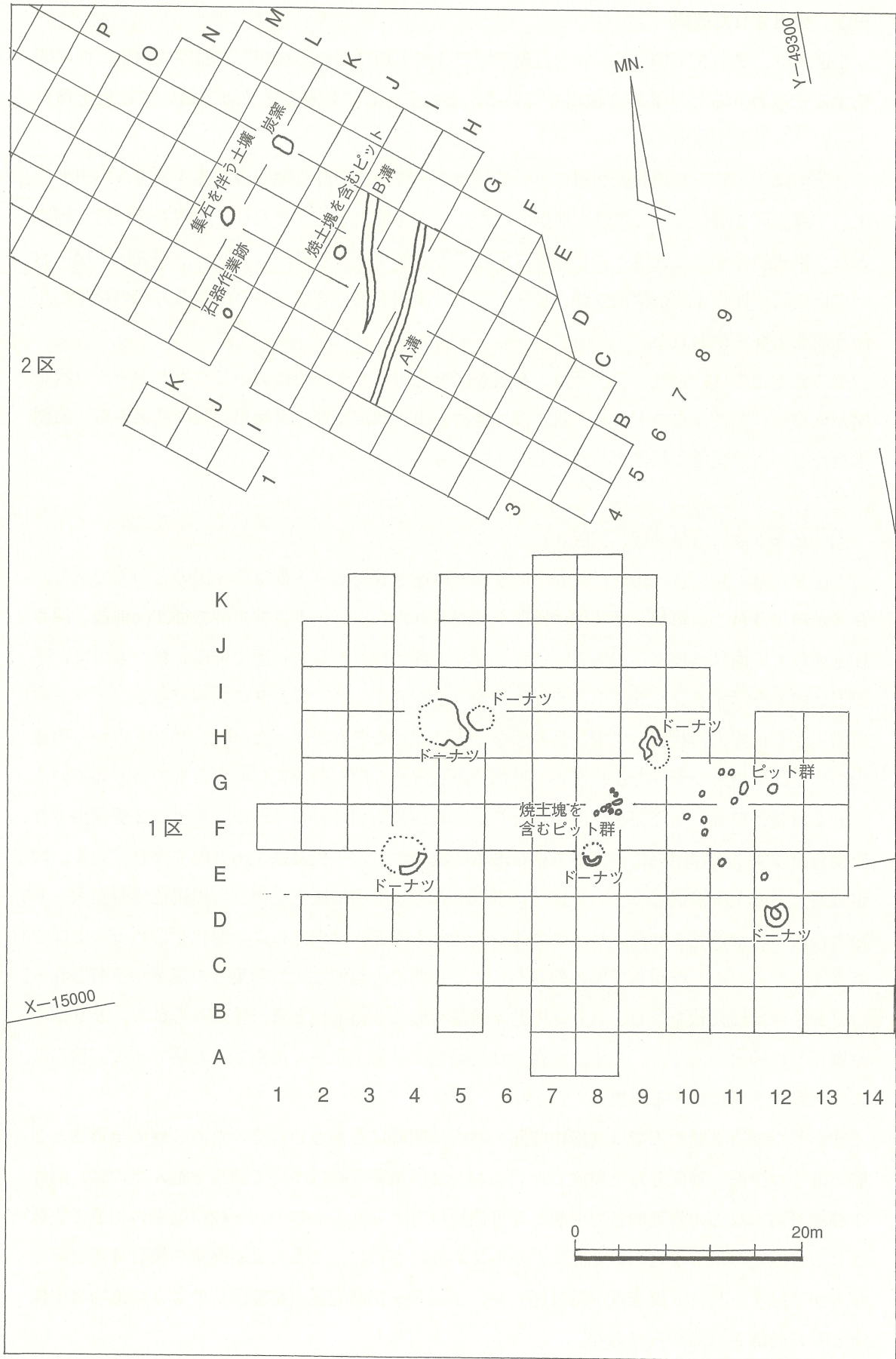
外業作業従事者 池田幸子、石橋文子、岩永クニ子、梅崎カズエ、大久保美智子、大島大輔、
蒲田ヨシノ、岸本和子、木下祝福、久保美代子、黒田玉子、古賀洋子、
酒井健一郎、坂田雪男、下釜ツユミ、隅哲三、田中アキエ、田中隆、
田中多美枝、田中月代、堤イツ子、寺田由紀枝、松尾繁富、松尾英子、
村田勉、山口カズエ、山口和子、山口シマ子、山口レイ子、山田君江、
山本千代恵、山本ヒロ子、横田ハツネ、餅田健、吉田義丸

内業作業従事者 大島大輔、富永淑子、秀島康子、平山裕子、
降田真佐子、三原寛子、渡邊三重子



第6図 遺跡地形図及び調査区設定図 (S-1/1,000)

(1~11は試掘調査区)
(青枠は本調査区)



第7図 1区・2区遺構配置図 (S-1/500)

一 3 検出された遺構

1区では、F-9・10、G-10・11調査区で3層上面において後期旧石器時代の生活面に関係すると思われるピット群を検出している。またF・G-8調査区2層においては焼土塊が入ったピット群を検出している。

2区ではJ・K-5調査区2層においてピットを伴う縄文時代晩期の石器作業跡が検出され、I-7調査区2層においては焼土塊が入ったピットを検出した。またG-4調査区付近を始点として東側斜面を下るA溝と、その溝に平行するB溝を検出している。L-7調査区2層においては集石を伴う土坑が検出され、K・L-7・8調査区の2層において隅丸方形の炭化物を伴う炭窯土壙を検出した。

その他1区のほぼ全域と、2区M-8調査区を北限とする一帯において点々とドーナツ状土壙が検出され、これらのドーナツ状土壙は遺物の出土状況及び土層検出状況の結果から、風倒木痕などの自然現象に起因する所産と考えている。

① ピット群 (第8図、図版3)

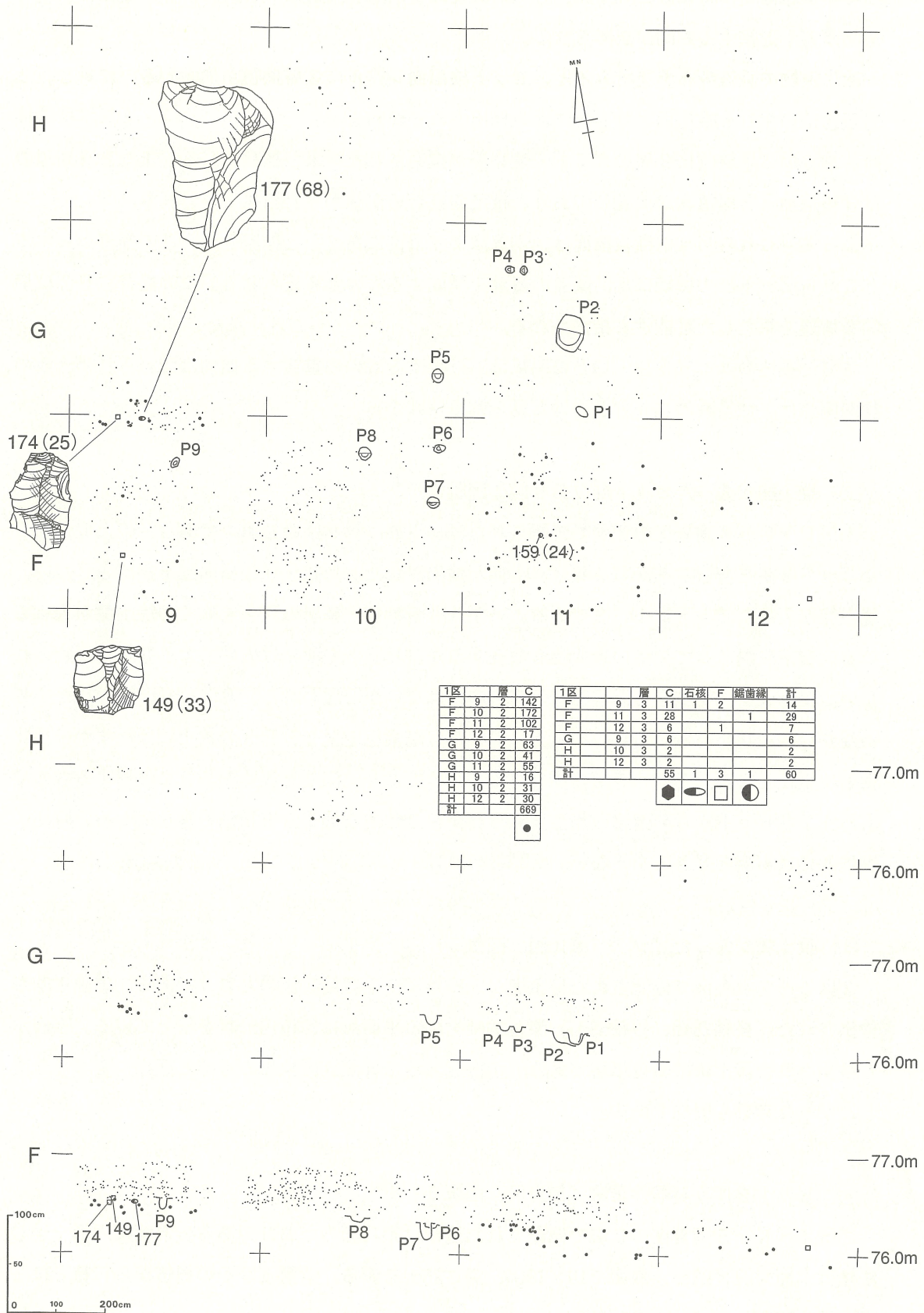
1区F-9・10、G-10・11調査区の3層で確認されたピット群は第8図のとおりである。9基が検出された。形状・寸法等は同図を参照されたい。ピットは検出時で径20cm前後、深さ10cm前後で底面はほぼ平らである。これらピット群は残りが悪い状態で検出されたもので、平面形は円形を示すP3～5、7、8と楕円形を示すP1、2、6、9に大別できる。ピット群の周辺からは竪穴形状を示す掘り込み面などの確認はなされなかった。また、ピット内からの遺物の出土は見られなかったが、後述の遺物分布状況から旧石器時代に属するものと考えている。

P2は長径75cm、短径55cm、深さ15cmを測る略四角形状のものである。覆土は2層検出され、灰褐色を示す上層は中央に浅く落ち込む堆積状況を示し、中央部は7cmと厚くなっている。肉眼観察であるが灰が混じっているように看取された。下層は灰色を帯びた黒褐色で親指大～米粒大の炭化物が散見された。ピット周辺や、ピット内面には火熱による変化を認めることはできなかった。しかしながら覆土の観察からごく短期で小規模な火気利用との関連が予察される。

P5～8は柱穴状を呈し、ピットの芯々距離も概ね2m前後と斉一性がみられる。P9はやや離れた検出であるが、いずれも覆土は黄褐色の3層土が黒く汚染された層である。検出時の状況から3層に属する遺構とした。

検出したピット群のみでは遺構の時期・性格は明確にし得ない。そのため3層の全遺物と2層の削片の平面・垂直分布を検討した。なお、2層掲載遺物について削片を選んだのは、削片の移動が雨水などの物理的営力で起こる可能性は考えられるものの、一般に廃棄の状態で放置される可能性のほうが大きいと考えたからであり、さらに、人為による廃棄の場合は遺物の在り方が2区J・K-5調査区(第11図)や、1区E-10調査区(第33図)のように遺物集中個所として認識されるからである。

ピット群周辺で出土した遺物の平面分布状況を見ると3層では、P1～8周辺では遺物の平



第8図 1区F~H-9~12調査区 ピット群及び遺物分布図 (S水平-1/120、垂直1/60)

面分布が希薄で、特にF・G-10、G-11調査区では顕著である。しかし、P9周辺には3層遺物が若干近接する傾向が認められる。

次に遺物の垂直分布を見てみると、ピット検出面レベルに3層遺物が集中するのに対し、2層遺物はいずれも検出面よりも上位から検出される傾向を示している。これは、2層堆積環境時、あるいは堆積後に3層のピット・遺物群が攪乱された結果と推察される。またP9周辺では3層遺物と2層遺物が混在しており、攪乱の度合いが強かった結果と思われる。

よって、これらピット群検出面は、本来はより上位にあったと推察され、この推察からするとこれらピット群の機能は生活関連の遺構を構成するものと考えられる。この場合、P2は炉的な機能を果たした可能性も指摘される。

さて、後述のユニット12・13との関係は、近接するものの重複する傾向は認められず、この相関関係は下城遺跡の在り方と同様と見られる(註1)。

② 焼土塊が入ったピット群(第9図、図版4)

1区F・G-8調査区の2層で確認されたピット群は第9図のとおりである。焼土塊が入ったピット2基を含む7基からなるピット群が検出された。形状・寸法は同図を参照されたい。焼土塊が入ったピットは1、2である。いずれも暗紫色・単層の覆土を除くと焼土塊が入っている。覆土に混じって少量の炭化物も散在するが、ピット壁面には火熱による変化は認められない。焚き火の後始末をした蓋然性が高いのではないと思われる。P3、6、7は径が小さいながら柱穴状である。これらの覆土はいずれも暗紫色を呈し、P3の覆土にはわずかの炭化物と焼土粒を含む。P4、5は極少量焼土が入っており、深さも浅く1、2に付属するものであろう。各ピットからの遺物の出土は見られず、全体的な纏まりを指摘できないため、時期・機能的には不明とせざるをえない。

③ 焼土塊が入ったピット(第10図、図版5)

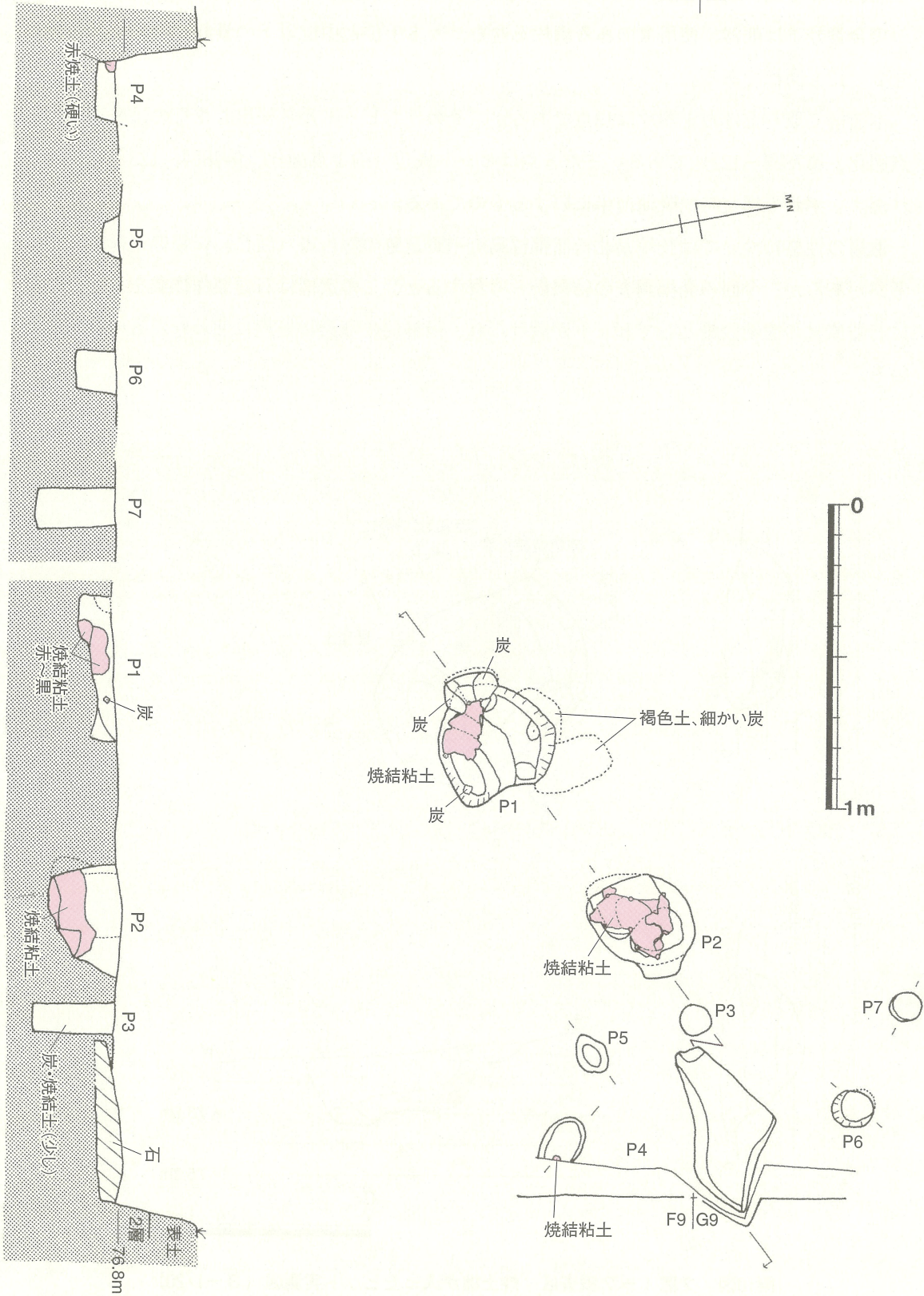
2区I-7調査区で確認された焼土塊が入ったピットは第10図のとおりである。単独1基が検出された。長軸73cm、短軸55cm、深さ22cmを図る平面形は、楕円形状を呈している。2層から検出され、覆土は暗紫色単層である。1区F・G-8調査区検出のものと同様に変わりなく、したがって考察も同様である。

④ ピットを伴う石器作業跡(第11図、図版6)

2区J・K-5調査区の2層で確認された遺構は第11図のとおりである。形状は円形を呈し、法量は上面で24×23cm、底面で19×19cm、深さ25cmを測る。遺構及びその周辺から石核をはじめ石製品230点、土器片13点が出土している。

本遺構で取り上げた石器227点の内容は、削器・抉入り石器が各々1点、石核2点、使用痕のある剥片3点、剥片100点、削片120点である。その中で接合関係は赤色チャートの石核1点

F7 | G7
F8 | G8



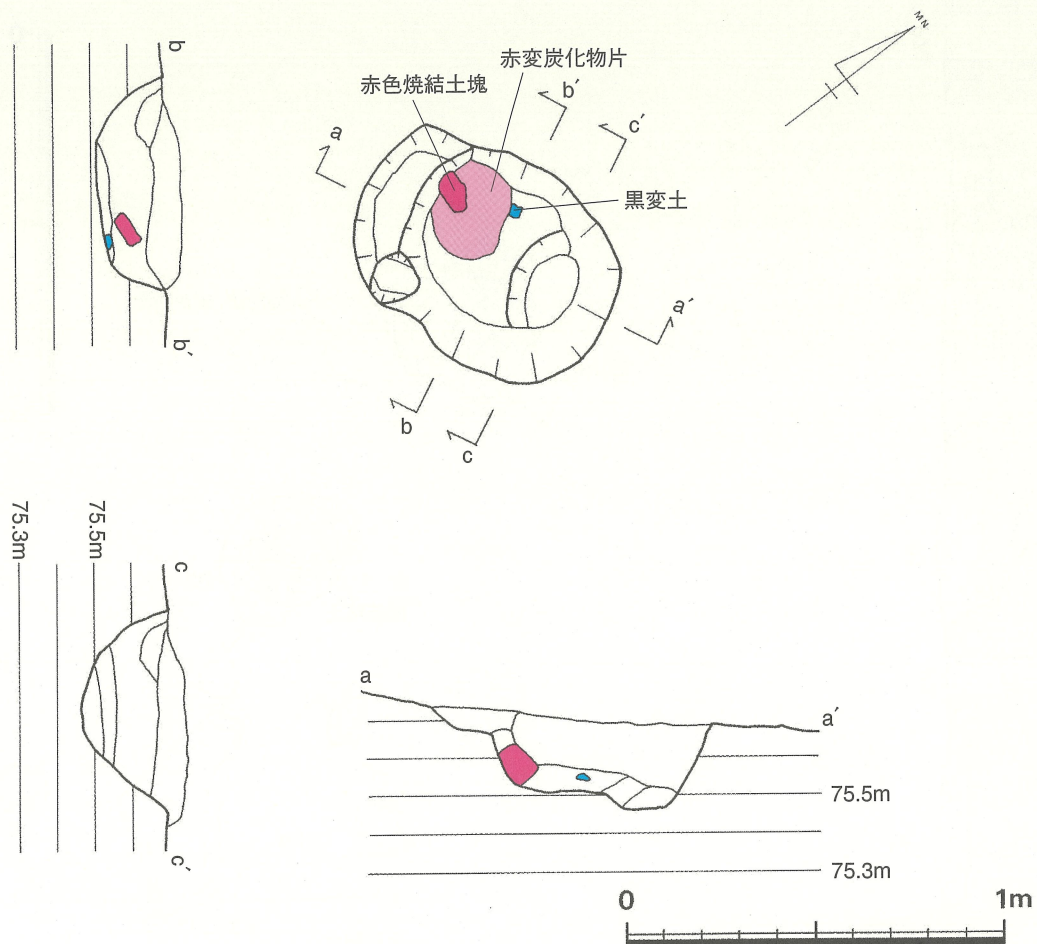
第9図 1区F・G-8調査区 焼土塊を含むピット群実測図 (S-1/20)

+剥片1点+削片2点による1セットと、黒曜石を素材にした使用痕のある剥片1点及び削器1点、剥片1点、削片2点による1セットなど13セットが接合した(第2表)。

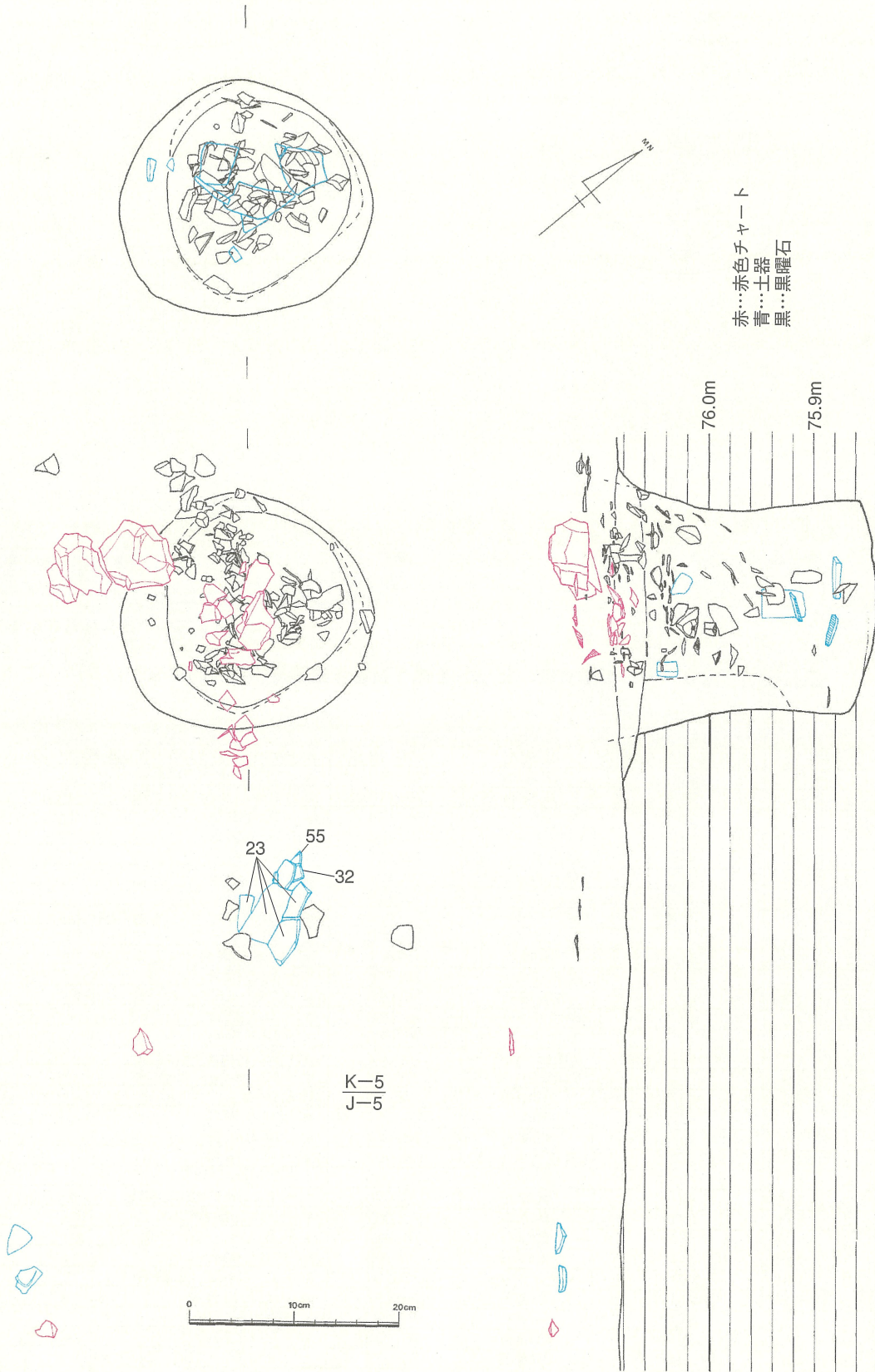
接合番号1は削器、使用痕のある剥片を含むピット上位と中位以下の資料が接合し、接合番号2・12も同様である。

本遺構で取り上げた土器片は13点であるが、そのうちピットから検出したものは8点(内1点図化、第78図-122)である。また5点はピット底辺(内1点図化、第78図-123)で検出された。いずれも縄文時代晩期前半に属するものである。

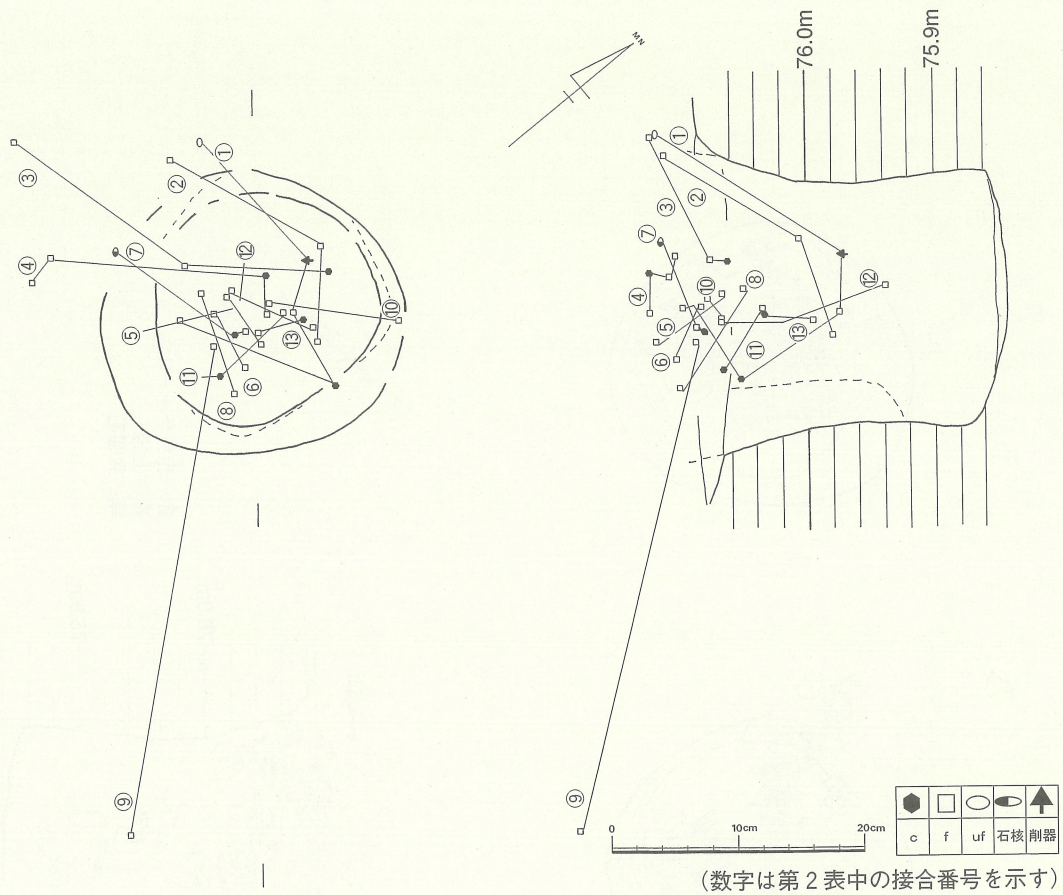
遺構の性格については長崎県北松浦郡福島町平野遺跡の報告書(註2)に類似遺構に関する考察があるが、今回の発掘調査の結果から考察すると、この遺構は石器製作作業を行った場所に石器原材の埋納設備としてピットが設けられ、最終的に廃棄物処理に使われたものと考えている。



第10図 2区1-7調査区 焼土塊が入ったピット実測図(S-1/20)



第11図 2区J・K-5調査区 ピットを伴う石器作業跡実測図 (S-1/6)



第12図 2区J・K-5調査区 ピットを伴う石器作業跡遺物接合図 (S-1/6)

接合番号	区	No	種別	石材	標高(m)	備考
1	2	1	使用痕のある剥片	黒曜石	76.12	s-196・37・155・213接合
2	2	4	剥片	黒曜石	76.112	s-215、s-203と接合
3	2	6	剥片	黒曜石	76.118	s-104、s-128と接合
4	2	9	削片	赤色チャート	76.126	s-10と接合
4	2	10	剥片	赤色チャート	76.126	s-9と接合
5	2	11	剥片	赤色チャート	76.12	s-93と接合
6	2	12	剥片	赤色チャート	76.104	s-43と接合
7	2	13	石核	赤色チャート	76.115	s-57、58と接合
4	2	14	剥片	赤色チャート	76.1	s-15、s-9、s-10と接合
4	2	15	剥片	赤色チャート	76.106	s-15、s-9、s-10と接合
8	2	16	剥片	黒曜石	76.1	s-138と接合
9	2	21	剥片	赤色チャート	76.186	s-42と接合
1	2	37	削片	黒曜石	76.098	s-196・155・1・213と接合
9	2	42	剥片	赤色チャート	76.088	s-21と接合
6	2	43	剥片	赤色チャート	76.082	s-12と接合
7	2	57	剥片	赤色チャート	76.092	s-13 (core) と接合
7	2	58	削片	赤色チャート	76.08	s-13 (core) と接合
	2	82	剥片	黒曜石	76.09	Hと接合
10	2	88	剥片	黒曜石	76.067	s-9と接合
10	2	90	剥片	黒曜石	76.077	s-88と接合
5	2	93	剥片	赤色チャート	76.067	s-11と接合
11	2	100	削片	黒曜石	76.066	s-159と接合
3	2	104	剥片	黒曜石	76.076	s-6、s-128と接合
12	2	124	剥片	黒曜石	76.067	s-225と接合
3	2	128	削片	黒曜石	76.062	s-6、s-104と接合
8	2	138	剥片	黒曜石	76.05	s-16と接合
7	2	148	削片	赤色チャート	76.04	s-13 (core) と接合
1	2	155	削片	黒曜石	76.051	s-1と接合
11	2	159	剥片	黒曜石	76.035	s-100と接合
13	2	180	削片	黒曜石	76.033	s-199と接合
1	2	196	剥片	黒曜石	75.974	s-1・37・155・213と接合
13	2	199	剥片	黒曜石	75.992	s-180と接合
2	2	203	剥片	黒曜石	76.02	s-4、s-215と接合
1	2	213	削器	黒曜石	75.972	s-196・37・155と接合
2	2	215	剥片	黒曜石	75.988	s-4、s-203と接合
	2	220	剥片	黒曜石	75.942	H、Hと接合
	2	224	剥片	黒曜石	75.918	Hと接合
12	2	225	剥片	黒曜石	75.926	s-124と接合

第2表 2区J・K-5調査区 ピットを伴う石器作業跡出土石器接合一覧

⑤ A溝・B溝（第13図、図版7）

2区G-4調査区を検出起点とし、H-7調査区を検出終点とするA溝、及びH-5調査区を検出起点とし、J-10調査区を経て調査区外に延びるB溝が第13図のとおり確認された。A溝は現存の長さ16m、幅50cm、深さ10cm強を測る。断面形状はV字～梯形～半円形状を呈する。B溝は現存の長さ20m程度で、途中で一部切れている。幅は60cm、深さ10cm～20cmを測る。両溝とも覆土は2区第2層の土がわずかに黒味を帯びた色調の単層である。A溝から削器1点、剥片5点、土器片8点が、B溝から石鏃1点、剥片4点、土器2点を出土したが、土器の観察結果から縄文時代晩期（第77図-92）に溝が形成され、短期間で一気に埋没したことが窺える。B溝の成因については形状から自然現象とするのが妥当であろう。A溝については検出起点より地形的に一番高いところを越えてG-3調査区に延びてゆく様相が窺えるので成因についてはB溝と異なり、人為によるものであろう。

⑥ 集石を伴う土壇（第14図、図版8）

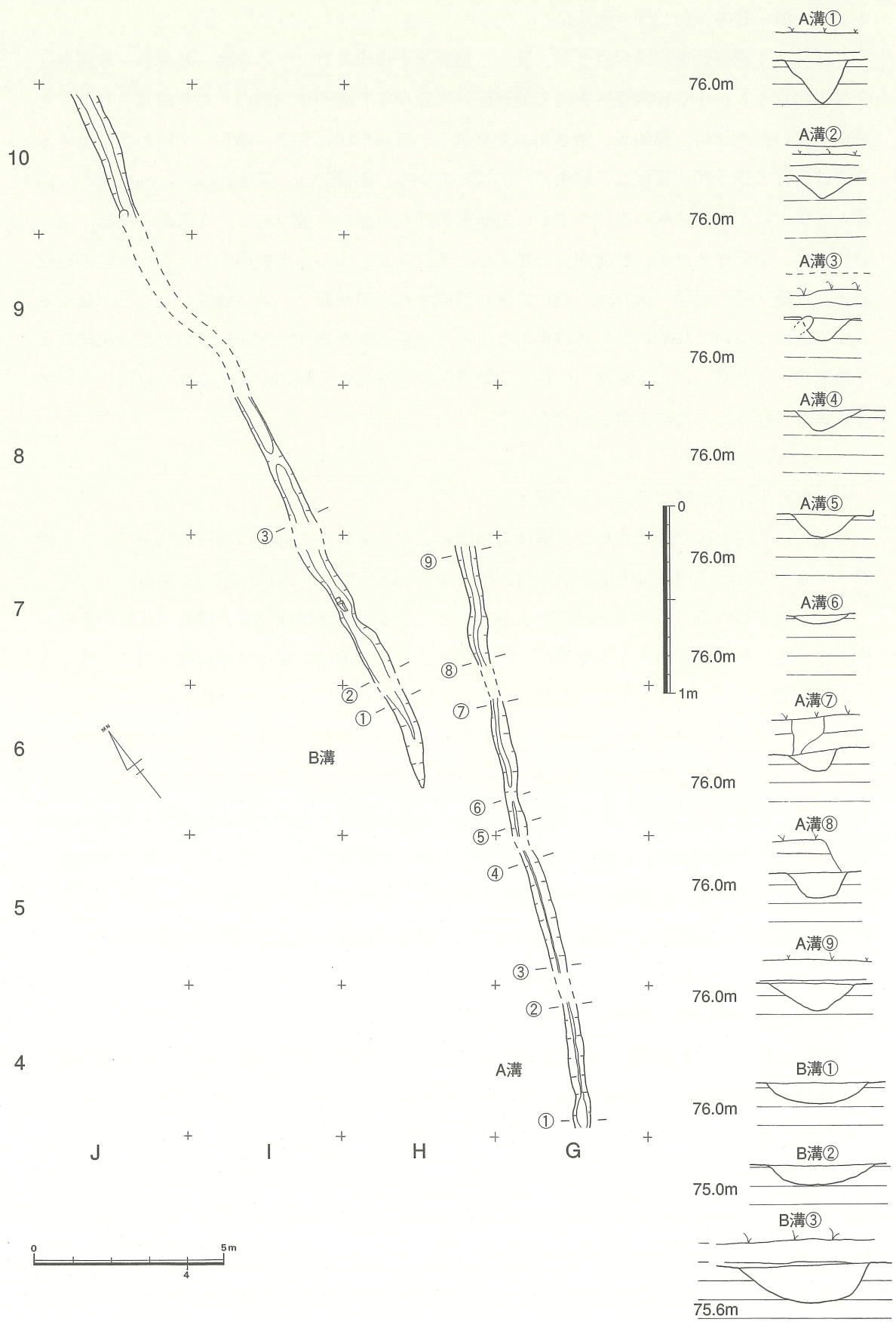
2区L-7調査区で確認された遺構は第14図のとおりである。形状は楕円形状を呈し、三段掘りになっている。法量は上面で145×120cm、深さ45cmを測り、底面は平らである。

表土を剥ぎ始めると、拳大前後の大きさを主とする安山岩亜角礫を敷き詰めた状態の集石が検出された。集石は礫の大きさを選び、最下部には人頭大前後の安山岩亜角礫を用い、礫は浮いた状態であった。つまり何かの有機質のものを埋納した後に、大き目の礫を積み、その後、拳大の礫を積んだようである。なお、この集石が二段目の平坦面に積んだとすると、中膨らみの形状を示していたと思われる。集石の間隙を埋めた土は表土と2層の土が混じったような土質である。土壇下部には覆土が3層検出された。1層は黒褐色土で2区に堆積する2層の土質に似ている。2層は土質・色調ともに1層に似るが、炭化物をふくんでいる。3層は黄褐色土で固くしまっている。本遺構からは遺物が出土せず、類例をみないので構築の目的など不明とせざるを得ない。時期としては検出時の状況や、覆土の状態から近世以降の所産であろう。

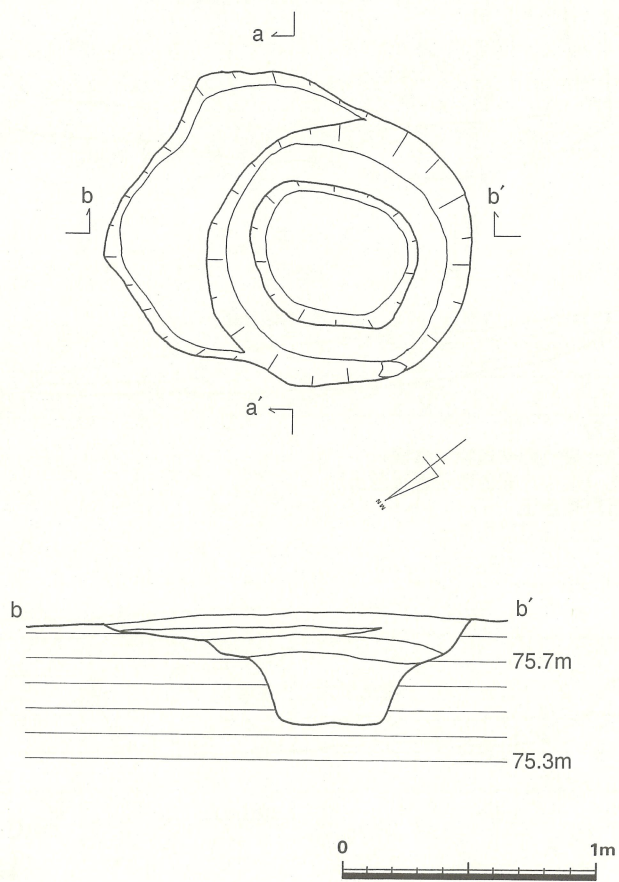
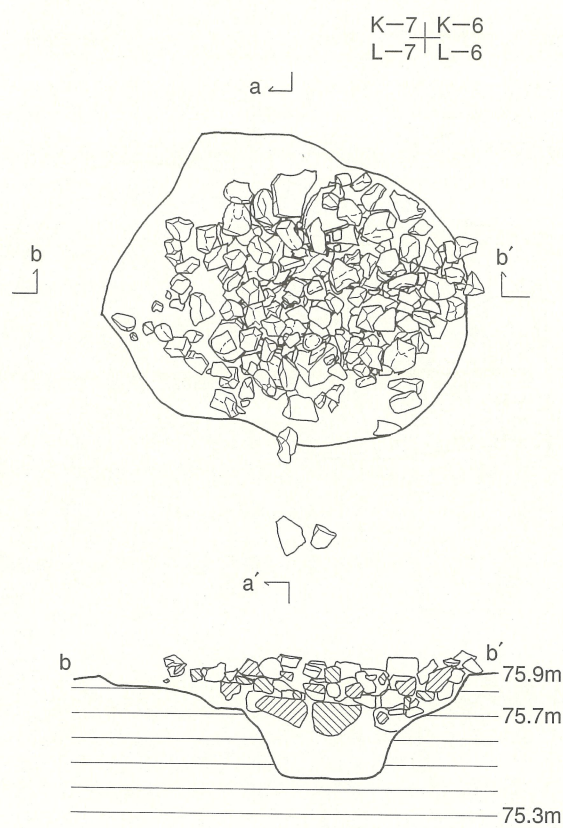
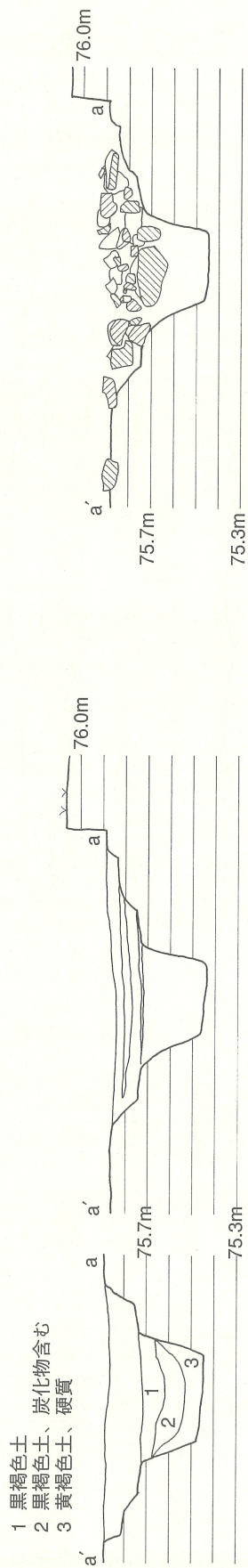
⑦ 炭 窯（第15図、図版9）

2区K・L-7・8調査区で確認された炭窯は第15図のとおりである。形状は隅丸長方形で、法量は底面で長軸210cm、短軸160cm、深さ10cmを測る。K-8調査区の表土を剥ぐ作業中に木炭片を含む暗灰色のプランが現れ、最終的には2層に掘り込まれた隅丸長方形の土壇を検出した。暗灰色の覆土には木炭の破片や炭粉を含み、一部には木炭片が堆積した状態で検出された。床面・壁面には火熱を受けた痕跡はほとんど見られず、床面の一部にわずかに赤変を認める程度である。

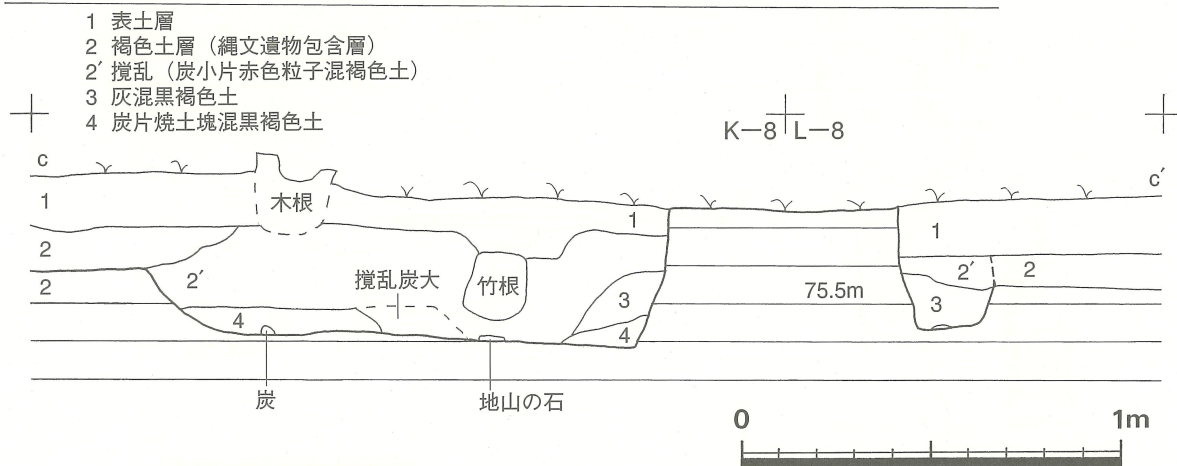
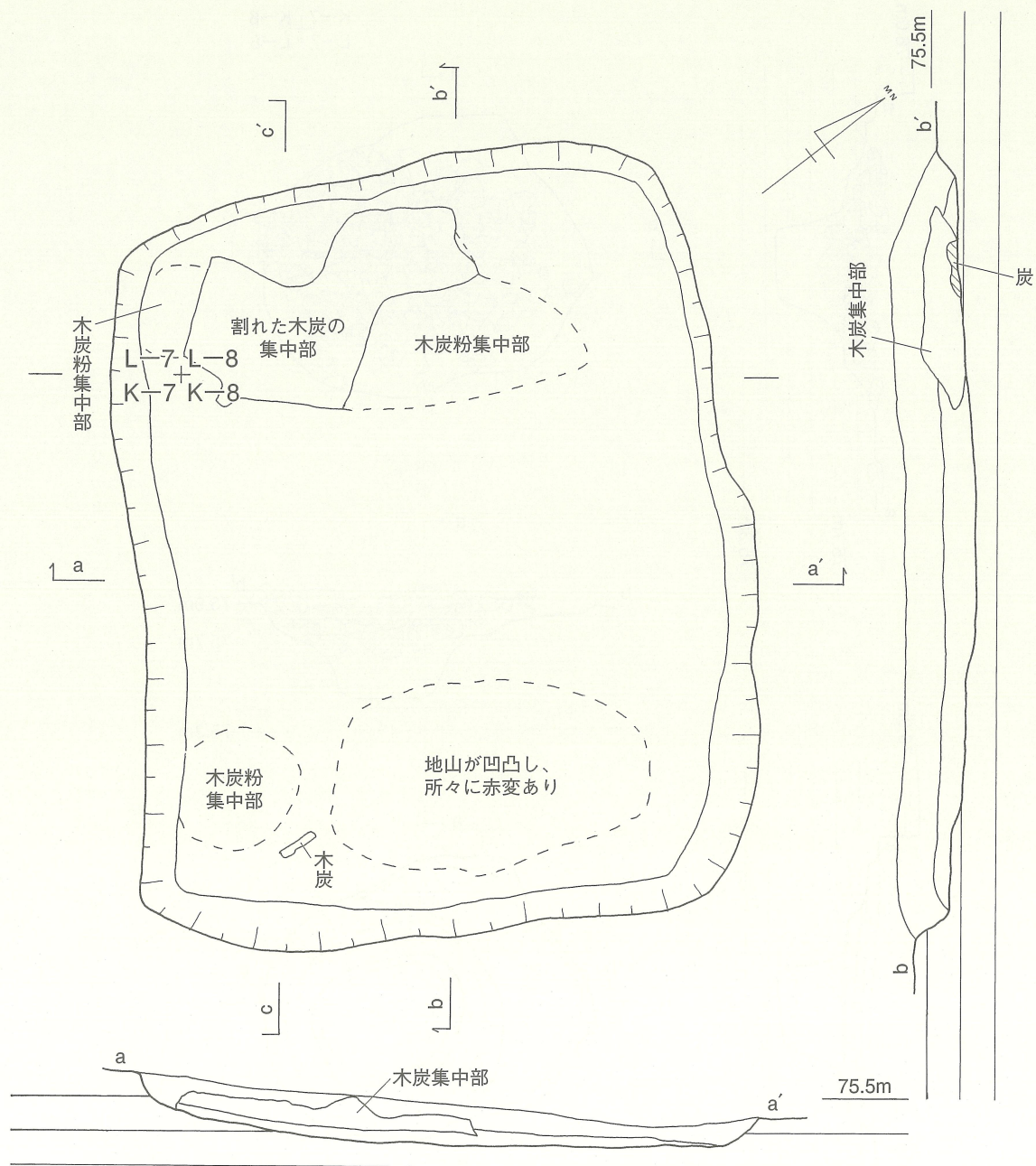
本遺構は平成8年度に発掘調査を実施した下峰原遺跡C地点でも検出され、長方形土壇として報告された遺構と同一のものである（註3）。



第13图 2区A溝、B溝実測図 (S-1/60 · 1/30)



第14図 2区L-7調査区 集石を伴う土壌実測図 (S-1/30)



第15図 2区K・L-7・8調査区 炭窯実測図 (S-1/20)

⑧ ドーナツ状土壌 (第16図、図版10)

今回の調査で検出されたドーナツ状土壌のうち1区H・I-5調査区で検出したものを第16図に挙げることにする。形状・寸法は同図を参照されたい。大形の土壌であり、いわれているように樹木の転倒による痕跡であれば、相当の樹齢を経た大木が予想されるところである。

検出時は周辺にやや黒味を帯びた褐色土があり、中央に火山碎屑物層が打ち上がった状態のドーナツ状であった。1層は表土である。3層は火山碎屑物層であって1区5層に該当する。2層はやや黒味を帯びた褐色土で、1区2層に火山碎屑物層が少量混入したような土質である。

遺物は石鏃(第55図294)3点、碎片49点が出土している。出土した石鏃からすると縄文時代早期の所産と考える。

註1 下城遺跡ではC・D-5区、第IV層a-2面下で集石と16個の柱穴様ピットが検出されている。ピットの径は10cm前後で、平面形状は円形である。ピット群は約3×2.5mの楕円形の平面形状を示している。ピットの芯々距離はばらつきがあるが、約50cm内外で、深さは20cm前後である。また集石はピット群外の西に近接しており調査者は「これらの安山岩円礫は本来的に第IV層に包含されるものでなく、何らかの目的をもって持込まれたものとみられる。礫の表面はあかく灼けていて、火熱を受けている。また集石周辺には木炭粒が検出された。」と述べている。また「これら柱穴状のピット群の解釈をどうするかは、集石、木炭粒の検出などからして生活址の可能性を強くのこすものの、それが当時の住居址であるかとなると、もう一つ決定的証拠に欠ける憾みがあった。」と述べている。遺物の分布はピット群の範囲内にナイフ形石器など定型的石器がわずかに分布するものの、石核、尖頭状石器をはじめとする多くの遺物はピット群の西側に集中する傾向を見せている。時期は日の岳Ⅲ層近似としている。

熊本県教育委員会 『下城遺跡Ⅰ』 1979

註2 長崎県教育委員会 『平野遺跡』 長崎県文化財調査報告書 第160集 2001

註3 市内湯野尾町在住の林虎作氏によれば検出遺構と同様規模の踏み窯という簡易な窯で製炭したこともあるとのことであり、本窯がその遺構と思われる。

この炭窯は「堆積製炭法」のなかの「伏焼製炭法」と分類された製炭方法を実現した窯と考えられる。

『木炭に関する経済調査』によれば

「二、堆積製炭法 此ノ方法ハ欧州諸国ニ於テ最モ多ク採用セラル、方法ナリ。本邦ニモ縦積、横積アリ。我国ニ於イテハ横積法ノ一種トモ見ルベキ伏焼行ハル、ノミ。伏焼製炭法ハ地面ヲ掘リ下ゲ或ハ平坦ニシテ床ヲ造リ敷木ヲ置キ、其ノ上ニ炭材ヲ横積シ適當ノ高サト為シ其ノ上ニ切子ト称シ細キ炭材ノ短ク切リタルモノヲ置キ枝葉ヲ以テ其ノ上面左右ヲ被覆シ、其ノ外面ヲ素灰ニテ被イ点火スルコトニヨリ炭化セシムルモノナリ。此ノ製法ニ依レバ其ノ製品ハ多ク一尺内外ニ折レ全長炭ヲ生ズルコト少ク且木炭ノ外面ノ光沢良好ナラザルモ、炭質ハ堅硬緻密即優良ニシテ取得数量モ亦少ナカラズ。四国地方ニ於テ古クヨリ行ハレタル製炭法ナリ。」と記している。

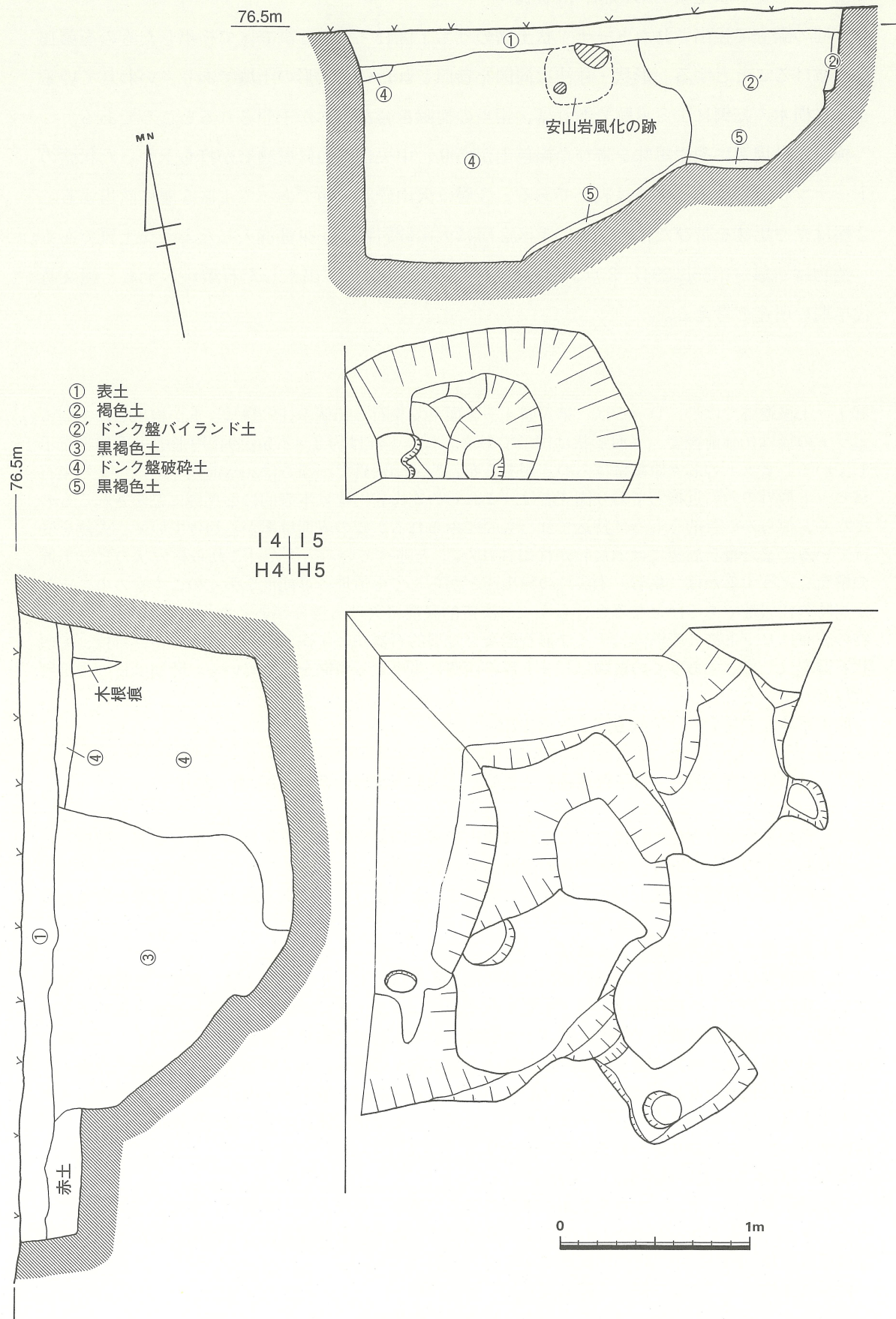
また、『日本木炭史 経済編』によれば

「(3)堆積製炭法一地上に木材を截頭円錐形に立てて集め、その上を土で被い、点火して焼く方法で、ヨーロッパでは古くからおこなわれている。日本ではこの木材を横積みにして伏焼とよんでいる。製品は原木の18~20%、中品位の黒炭ができる。」と記している。

鉄道省運輸局 『木炭に関する経済調査』 大正13年

社団法人 全国燃料会館 『日本木炭史 経済編』 昭和35年

諫早市埋蔵文化財調査協議会 『下峰原遺跡』 1998



第16図 1区H・I-5調査区ドーナツ実測図 (S-1/30)